

姫路工業株式会社は、下記のようにすでに繰越欠損金1,000万円があり、かつ基準年度においても500万円の欠損金が発生している状況です。合理化再建策の効果がまだあげられないため、計画年度において下記のような事態が予想されるとすれば、資金需要はいくらになると推計されるでしょうか。

- ・ 売上高 30%減
- ・ 付加価値率 50%は変化なし
- ・ 固定費の発生額は変化なし
- ・ 基準年度の売上高は2億円

資産に対する計画

- ・ 現金・預金保有高は現状維持
- ・ 固定資産についても整理、処分、増設等の計画はありません。
- ・ 受取勘定や棚卸資産等は、売上高と同様に30%減の計画です。

基準年度の貸借対照表借方は下記の通り。

基準年度B/S(貸方)		万円
A(現 預 金)		500
B(1)(受 取 手 形)		3,750
B(2)(棚 卸 資 産)		2,500
C(固 定 資 産)		1,750
G(1)(繰越欠損金)		1,000
G(2)(当期欠損金)		500
合 計		10,000

(アルゴリズム)

$t(\text{総資金需要倍率}) = a(\text{現預金倍率}) \times A_i(\text{現預金構成比率}) + b(\text{受取勘定倍率}) \times B_i(\text{受取勘定構成比率}) + c(\text{棚卸資産倍率}) \times C_i(\text{棚卸構成比率}) + G(1)i(\text{繰越欠損金構成比率}) + \left\{ \frac{m \cdot s(\text{新付加価値率}) - (m - u)(\text{固定比率}) \times f(\text{固定費倍率})}{u(\text{売上利益率})} \right\} \times G(2)i(\text{当期欠損金構成比率})$

入力

現預金	500
受取勘定	3,750
棚卸資産	2,500
固定資産	1,750
繰越欠損金	1,000
当期欠損金	500
合計	10,000

売上高倍率	0.7
現付加価値率	0.5
目標付加価値率	0.5
売上利益率	-0.025
現預金倍率	1.0
受取・棚卸資産	0.7
固定資産倍率	1.0
固定費倍率	1.0
基準年度売上高	20000
基準年度固定費	10500*

*基準年度固定費 = (売上高 20,000 × 現付加価値率 0.5) - (売上高 20,000 × 売上利益率(-)0.025) = 10,500

出力

資金需要倍率	1.163
資金需要額	1,625

予想損益計算書

(単位 万円)

比例費	10,000 × 0.7 = 7,000	売上高	20,000 × 0.7 = 14,000
(付加価値)	7,000		
固定費	10,500 × 1 = 10,500		
欠損金	△3,500		
	14,000		14,000

(検算)

予測貸借対照表借方

現預金	500
受取勘定	2,625
棚卸資産	1,750
固定資産	1,750
繰越欠損金	1,500
当期欠損金	-3,500
合計	11,625